

沖繩本島における海岸線利用に関する調査研究

(その3) 本部半島における海岸線利用の現状と問題点

正会員 石丸紀賢^{*1} 同 松尾仁美^{*2} 同 岡本二郎^{*3}
(協同研究者) 中村誠司^{*4} 薄辰員 武枝正孝^{*5}

5. 地域住民と海岸線利用

その1, 2において海岸線利用を比較的マクロな観点で把握した。その結果、沖繩本島の海岸線は量的にも自然的にも比較的豊かであるが、現実にはそのすばらしいはずの海岸線がたんと地域住民の手からもぎとられ、閉鎖されつつあるという問題が明らかになった。このことをより詳細に検討するため、海洋博開催をめぐって大きくゆれ動いている本部半島に焦点をあて、再調査を実施した。現在および過去において地域住民がどのような海岸線利用をしており、それがどのような力によって変容させられているのかという問題意識からである。調査は本部半島のうち名護市(14-0の一部から、本部町・今帰仁村の全域と名護市(14-B)の一部に及ぶ。先の調査をふまえて、ここでは市(行政区)毎に、地域住民の海とのつながりを日常的な海水浴、浜の遊び、釣り、漁業、伝統的民俗行事において把握しようとした。さらに海岸線をめぐる問題状況をつかむために、①土地買占の状況、②埋立の状況、③企業立地の状況を調査し、それらを地域住民に対する海岸閉鎖の観点からまとめた。これらを集計整理したものが表-3、図-4である。表-1,2と若干の差違があるのは精度の異なる作業結果のためである。

地域住民と海とのつながりは次のようである。①海岸線は従来開かれたものとして存在し、海岸線から防瀬・防風林にかけては誰の私有でもない。②地域住民の海岸線利用量は浜において最も高く、また海とのつながりはく市街地(集落海岸)の住民において最も強い。そこはまた漁業に従う者の住う場でもある。この意味で本部半島西海岸は地域住民利用の高密度な海岸線からなっていると言える。③かつて農業は肥料や砂の供給を介して海や浜と強く結びついていた。④今日においても地域住民は生物相のきわめて豊かなピニ(リーフ)を趣味的というより日常的に釣りや貝類採取のたのしみの場として利用している。⑤本部町・今帰仁村域では89%の海岸線が子どもたちをはじめ、地域住民のレクリエーションの場として利用されている。そこは集落の〈前の浜〉・〈後の浜〉として気軽に安全に遊べる場である。⑥沿岸漁業は衰退の傾向にあるが、半島西海岸にはなお90隻程のサバニがあり、漁師がいる。⑦中でも浜元地先の浅海域は、浜崎漁民の追込み漁場としてなお活況している。ここは海洋博の海上施設予定地でもある。⑧海や浜と結びついた伝統的民俗行事も地域社会の変容とともに下火になってきているが、なお多くの集落で継承され、行なわれている。沖繩民俗文化の強さと、その海とのつながりの深さを示すものである。

しかし、本部半島の地域住民は今急激に海岸線から締めだされている。汚染等による海岸線環境の悪化や地域の社会経済の変化に伴う海岸線利用の退行に加え、海洋博が誘発した海岸線付近の土地買占や埋立によって、いわば即物的に地域住民による海岸線利用が妨げられ始めている。基地による障害のほとんどないことかかえてこのことを顕化させている。問題点は次のようである。①本調査域の41%はすでに名目上閉鎖され、うち土地買占は市街地を残して全域的に進められ、37%にも達している。なかでも与那種から越知に到る海岸線は大部分買われしまった。②海洋博用地方は3750m²のほり、しかも半島西海岸は買占に加えて埋立による閉鎖が顕微化している。すでに右茶・大浜地先95万坪が埋立られた。さらに浜元・瘦久地地先5万坪と健聖・崎本部地先3万坪が計画されており、これだけで30km余りの海岸線が人工化される。③埋立計画が実施されると本域の閉鎖海岸は53.8%にあがる。④半島の南海岸は埋立や採石のため海岸線の人工化・荒廃化が進んでおり、残された自然産の高い海岸線がこのように大規模に、しかも利用計画も持ちあわせない買占め主体によって不所有されていくことは、地域住民の海岸線利用にとって重大な障害となるばかりでなく、今後の利用のされ方如何によっては事実的に閉鎖海岸化する危険がある。このような土地の売買は地域の生活基盤を根こそぎ破壊するものであり、その利用権は地域住民に確保されるものと考えなければ、地域の将来は考えられない。

^{*1}(元島大学助手 ^{*2}九州大学助手 ^{*3}吳高専助手 ^{*4}元島大学文学部地理学科大学院生 ^{*5}元島大学大学院生)

